

「宗教と部落差別」

——キリスト者として——

小野 一郎

はじめに（自己紹介）

今日はお招きをいただき、キリスト者の立場から宗教と部落差別についてお話の機会を与えられて喜んでおります。また責任も感じております。本題に入ります前に自己紹介をいたします。私はいまご紹介をいただきますように一九二七年（昭和二年）二月一日、今日ではバレンタインの日などといわれておりますが、この日に大分県耶馬溪の山奥に生まれました。その後、関門トンネルが開通した直後の頃に、はじめて九州から離れまして大阪の方に出てまいりました。その後大阪を中心とする関西地方で生活をいたしました。一九四九年（昭和二十四年）同志社大学に進みまして、その後神学部に学びました。二二歳の時クリスチャンとなり、学校卒業後今日まで牧師として働いているわけでございます。この間の

いろいろなことがございましたが、私は浄土真宗本願寺派（西本願寺）の門徒の家に生まれ小さい頃は親鸞上人の教えのもとに育ってまいりました。それらのことについて、最近でございますがNHK学園創立三〇周年記念の自分史文学賞の募集があり、たまたまそれに応募し六歳から二二歳までのことを中心にまとめて書きまして、佳作に入選し、それが本になって出版されております。その中にこまかなことが書いてありますので、もしご希望のことがあれば、平田さんなどを通してお送りさせていただいてもいいと思っております。そういう私でございます。青年時代は山陽本線を利用して九州と関西を何回も何回も往復いたしました。戦争中から戦後にかけてとくに頻繁な行き来でありましたが、こうしたことがらを先ず皆様にご紹介いたしましたお互いに深い

人間の交わりの中で今日の問題を考えて見たいと思うの
でございます。

一 宗教の本質

a 人間の存在の底を探る

私の先輩が「無法松の一生」という映画を見て、その
映画のラストシーンに深い感銘を受けて、その話しをし
てくれたことがあります。それは五〇年も昔のことです
が、私はその時のことをよく思い出します。

さて、そのラストシーンというのは、うっすらと積
もった雪の道に、無法松の引く人力車の轍のあとがくっ
きりと続き、その人力車と無法松の影が段々小さくなっ
て「終」という字が出るというものでした。

その先輩は芸術家はだの青年でありましたから、私な
どの気付かないこまかなことに気が付き、映像芸術の立
場から感銘をひとしお深くしたことと思います。それだ
けに、その話を聞く私に実際の映画を見た以上の感動を
与えてくれたことと思います。そして、その感動が五〇
年を過ぎた今も私の中に残っているのでありましよう。

その感動はその後、私が人生を考えるとき、いつも一つ
の問題として表面にでてくるのです。それは「轍」と、

「轍を付けるもの」との関係の問題です。

無法松という人が人力車を引いて走る。そのあとに二
本の轍と足跡が続く。轍と足跡を見れば無法松が走った
ことがわかる。無法松が止まれば、轍も足跡もできなく
なる。この問題にはなにが隠されているのでしょうか。

私達は日常生活の中で、大抵の場合「轍」や「足跡」
ばかりを問題にしながら生きています。だけれど何かを
やったとか、なにかが起こってこんな結果が出たとか、
そんなことばかりを問題にしています。そして、これら
のデータ（資料）を克明に集めて、それを分析したり、
総合したりしてなにかの結論を導き出しています。そし
てこういうやり方を科学的であると言っています。たし
かに、この方法である結論は導き出せません。しかし、こ
の方法では決して到達できないことが一つあります。そ
れは、轍や足跡を作り出した本体、無法松その人の行動
の一瞬一瞬を動かした原動力そのものを完全に把握する
ことはできないのです。別の言い方をすれば、生きて働
く無法松の生命（いのち）そのものにはだれも完全には
触れることができないのです。

無法松が、ひそかに愛し、尊敬し、この人のためには
どんなことをしてもいとわれないと思ひ詰めて生きている、
その生命そのものには、だれも触れられないのです。そ

これは無法松その人の固有の生命の実態であり、だれも犯すことのできない神聖な領域です。その神聖な領域から発する行動の軌跡が、人力車の轍の跡であり、足跡であるのです。

無法松の人力車の轍や足跡を一人の観察者として新聞に書いたり、映画に作ったりすることは可能です。しかし、無法松という人間の実存そのもの、生命そのものの根底を探り尽くすことは究極的には不可能なのです。それは無法松だけの問題ではなく、私達ひとりひとりのことでもあります。

一般に宗教といわれているものの課題は実にそこにあるのだと私は思います。日常生活の中で繰り広げられるさまざまな轍と足跡をたよりに、人間の究極を問題にしなから、根源的な人間の生命の問題に迫る、ここに宗教の意味があると思うのです。

宗教の本質は、人間生活の具体的営みの中から、人間存在の底を探り、生命の実態に触れることの中にあると思うのです。

b 生命の尊厳を知る

無法松という一人の人物のことに触れましたが、一人の人間がこの世に生を受けるといふことは、なにものに

も代えることのできない厳肅な事件であります。その人間はいろいろな環境の中で成長します。そして複雑な人間関係の中で人間としての社会生活を営みます。そのため、人間はともすれば自分自身をはじめ他人の生命の尊厳を忘れてしまい、この世の営みが人生の全てであるかのごとき錯覚に陥り、人間を粗末に扱うようになります。

昔、「一銭五厘」という言葉がありました。当時の葉書の値段が一銭五厘でした。「大日本帝国」は葉書一枚で国民を招集し、戦場に送り出すことができました。そのため「わしは一銭五厘じゃ」などという言葉が流行したのです。軍人勅諭には「義は山嶽よりも重く死は鴻毛よりも軽しと覚悟せよ」という言葉があります。天皇のためには生命を鳥の羽毛よりも軽いものと覚悟し、戦争で死ぬことを恐れず、名誉と考えよと命令されているのです。ここには生命の尊厳というような考えは毛頭ありません。天皇制、軍国主義、戦争遂行の目的のためには人間の生命などは消耗品に過ぎないというおそろべき思想がそこにはあります。

この思想は敗戦後半世紀を経た今日も、あちこちで生きています。それは生命の尊厳を無視する功利主義の思想であります。そして、権力による支配と人権無視の温床となっています。

宗教はこのような現実の中で、生命の尊厳を知ることが第一の目的として、かりそめにも生命の軽視や人権無視の思想に対して戦わなければなりません。歴史的にみても、釈迦もキリストもそのために独自の戦いを繰り広げたことがわかります。人間の生命を軽視する宗教があるとすれば、それは真理からはずれた状態になった宗教といわなければなりません。

生命の尊厳を知る道は、自己自身の尊厳性を知ることから始まります。そして、自己自身の尊厳性と全く同じように、他者の生命の尊厳性を認め受け入れることに導かれていくのです。

c 共に生きる喜びの確保

自己自身の生命の尊厳とともに他者の生命の尊厳がみとめられ、互いに受け入れ合う生活が生まれるとき、そこには必然的に喜びが生まれます。共に生きるということとは受け入れ合い、認め合い、お互いに生命の尊厳性が確保されていることの確保が喜びの根源となります。

「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣く」生活の根源には生命の尊厳性の確認が当然なければなりません。

宗教はこの確認をこの日常生活の中で確実にすると、その使命を果していると言えましょう。

d 歴史を貫くものへの接近

無法松という人がどのような人であったのか、それは原作者の創作であったかもしれないませんが、いずれにしても、そこにはひたすら純粹にある人を愛して、そのことを原動力として生きた人間の姿が描かれていることはたしかです。それが、さまざま人間の問題を突き破ってひとつの感動を与える人間像となっていることはたしかであります。世に名作と言われるものは全てひとつの共通点を持っています。それは、純粹な愛を求めて生きる人間の姿です。人間の歴史には争い、憎しみ、戦争、駆け引き、裏切り、その他さまざまのものが渦巻いております。しかし、不思議に人間の着地点は愛の世界であることがわかります。生まれてから死ぬまでのそれぞれの一生は愛によって生存を可能にし、愛によって育てられ、愛によって生き甲斐を見出し、愛によって平安に死を迎えることができるのです。

このことは、歴史を貫き、歴史を支え、歴史を進行させるものの根源にあるものは愛であるということであらわしていると言えましょう。各自の人間の尊厳性に目覚め、それを尊重し、それを受け入れ合い、それを生活の基盤とすること。そしてその基盤となるものへ無限に接近する生き方こそが、人間の本来のありかたであると思

います。宗教はこの問題をいつも見つけ、いつもその接近を試みる人間の営みであるとも言えましょう。それは、すべての真実を求める宗教に共通です。

二 宗教の陥る誘惑

a 観念論への転落

以上申しましたような宗教の本質であるといいたしましても、この宗教はしばしば多くの誘惑に陥ります。その誘惑は別の言葉で言えば「罪」ということになります。キリスト教の立場から申しますと皆様もご存じのように、神が人を造られたとき、男も女も裸でエデンの園で楽しく生活をしていました。しかし、神は園の中央の木の実を食べてはならないと命じていました。けれどもこの命令はへびの誘惑によって破られ人間は男も女も神の顔を避けて生きる者になりました。誘惑によって的外れの人生を送ることになったのです。この的外れの状態を聖書では「罪」というのです。

本来、人間の生命の尊厳を認め、お互いがその生命の尊厳を認め合う生活の中に宗教の本来の姿があるにもかかわらず、そのことから外れてしまうとき、そこには宗教の罪の姿が現れるのです。基本的には人間は神との関

係の中での外れになってしまいます。最初の人間からこのかた人間的には抜きがたく人間を支配しているように見えます。さきほど小森先生も言及されましたように「原罪（げんざい）」と言われるものです。人間の中から取り去ることのできない罪と考えられているものです。人間の自由を誤って用いようとするとき、人間の墮落、転落が始まります。本来間違っているものを観念的な論法によって固めるとき、その誘惑の結果はいよいよ強固になってしまうのです。

宗教は毎日の人間の生活に係わり、人間の尊厳性と人間の喜びを日常生活の中で確保する原動力として働くものです。しかし、宗教は日常性から離れた観念の世界に引きずりこまれる誘惑にさらされることが多いのです。

その理由にはいろいろありますが、なによりも人間の存在の底を探るという作業が見えない世界のできごととして受け取られることがその原因です。見えないものは見えるもののように証明したり、共通の実験による結論を引き出すことが難しいため、観念論を好む学者や特別の体験をした人々が際限もない論理を構築し、見えない世界の描写や証明を試みようとしています。地獄と極楽、地獄と天国、地上の国と神の国、罪と救い、等々ははてしなく論理は発展します。そして「教典」の蓄積となる。そ

の結果人間の生命の尊厳よりも、論理のための論理に誘惑されるようになるのです。

目の前で、人間の生命の尊厳性が奪われ、人権の無視と蹂躪が引き起こされているときでも、観念論者たちはその問題を考えることには熱心であっても、見える手をそこに差しのべ、共に泣き、共に喜ぶ生活に入ろうとはしません。それどころか、そのような見える世界の雑事は低次元の出来事であるとさえ考えるのです。批評と評論には雄弁であっても、具体的な行動を共にして人間の生命の尊厳をまもろうとはしないのです。

観念論は批評精神に貫かれています。事柄を対象化して良い言葉語りします。しかし、危急の時に直面しても指一本もその問題に具体的にふれようとはしないのです。その原因は自己の考えが中心になっているため、どのように考えても、この世の出来事はみな矛盾と袋小路に迷い込む以外になくなります。そして、自己自身の考えの中で何かの結論は出しますが、それは決して自分も人も喜びに溢れるような結論とはならないのです。それは他者の救いをもたらしません。

b 偽善者の製造

観念的になった宗教は偽善者の製造機械のようになり

ます。口や説教では愛や奉仕を説いてもその行いが伴いませんから、結果は偽善者になってしまうのです。

考えることと行動との間にギャップ（溝）ができた時、人間は偽善者になってしまいます。

c 権力との密着

偽善者は自己中心のため自己保存をはかります。そして自己保存のためにこの世の権力に対する抵抗心を失います。権力への服従だけではなく、進んで権力への従属を意図し、権力者を喜ばせるために、宗教的良心を放棄してしまいます。

d 人間の尊厳の忘却

この世の権力は常に残酷です。人間を物のように扱い、気に入らない場合には抹殺を試みます。そこでは、人間の生命の尊厳を主張する者は危険な思想の持ち主として排斥され、抹殺さえされます。人間の尊厳は忘却へと追い込まれ、権力者の尊厳のみが組織的に強調されます。

このような社会では、差別こそが真理であり、平等は悪の根源として退けられるようになります。人間の自由は、権力者への密着と権力者賛美のときにのみ保証されます。しかし、このような自由が真の自由でないことは

論を俟ちません。

三 キリスト教の場合

a 荆冠（いばらの冠）のキリスト

キリスト教の中心は聖書にあります。聖書は旧約聖書（二九卷）と新約聖書（二七卷）からなる膨大な書物です。歴史的文書としては、聖書は紀元前約一〇〇〇年から紀元後一〇〇年までにわたる約一一〇〇年間に、現在の中東地方で繰り広げられた人間の歴史がその背景になっっています。そして、その歴史の中で、一人の人（ナザレのイエス）が登場します。その人はユダヤ教の世界に生まれましたが、当時のユダヤ教の組織と権力構造の中に巣くっている不正と誤りを身をもって指摘しながら、抑圧と不正の中で苦しむ民衆とともに生き、その生活のただ中で、神の愛と正義を証しする生活に徹しました。しかし、その結果は時の権力者であるローマ帝国とそのもとに服従を余儀無くされていたユダヤ教の宗教的権力のために捕らえられ、十字架に掛けられてその生涯を終わりました。三三歳の若さでありました。

十字架に掛けられた時、イエスの頭には、荆で作られた冠がかぶせられ、「救い主よ、王よ、」とあざけられ

つばきをかけられ、棒でたたかれ、嘲笑の限りを尽くされました。そして、午前九時から午後三時までの六時間十字架上で苦しみ、遂に息を引き取りました。聖書によれば、この十字架上の苦しみの中でも、赦しと愛を短い言葉の中で残しました（十字架上の七言といわれる）。

このことの後、イエスは葬られました。三日目に復活して弟子達や女達や多くの人々に現れました。このような奇蹟的出来事によって、弟子達はイエスの生前の言葉や旧約聖書の言葉などを改めて思い起こし、「イエスは救い主（メシア）である」という信仰に立つことになりました。さらに、イエスの復活の日から五〇日目にひとりひとりに神の霊（聖霊）が下るといふ出来事が起こりました。これによって、人々の間には、更に強固な信仰共同体としての結束が生まれ、これが教会の誕生となりました。紀元三〇年前後のことでありました。それ以来、教会は約二〇〇〇年の間、滅びることなく、全世界に広がって今日に至っております。

教会のシンボル（象徴）は十字架であります。教会が建てられると、その屋根の上には十字架が立てられます。キリスト教の墓には十字架の付いた墓が立てられますが、それもこのシンボルであります。この十字架は、荆の冠をかぶせられて六時間の苦しみを耐えたナザレのイ

エスのことを象徴する徴です。

ですから、キリスト教徒はどのような時にも、どのような時代でも、荆冠のキリストとともに、その苦難を通して与えられた救いを神の恵みとして受けとめて生きていくはずであります。十字架はアクセサリーではなく、苦しむ者と共に苦しみ、喜ぶ者と共に喜ぶ「荆の冠」の人、イエス・キリストと共に生きていくことの徴であります。この、荆冠のキリストを忘れてしまえばそこには真実のキリスト教は存在しないことになります。

b 金冠（金の冠）のキリスト

ところが、私達の周りには、キリストに金色の彩色をあしらったり、キリストをこの世の王宮に住む王のように取り扱ったりする傾向が少なくありません。その背景には支配者や権力者たちが、民衆統治の目的からキリスト教に改宗し、その権力と財力によって教会や宗教団体を支配していくという政策があります。敬虔を装いながら、キリストや教会を手中に収めた結果、荆冠のキリストを金冠のキリストに変質させ、華美と荘嚴の舞台装置の中で、自己のエゴイズム（利己主義）の隠れ蓑に利用し、民衆抑圧のためにそれを用いるという手の込んだことをする場合もあります。

権力構造が宗教を利用する方法は洋の東西を問わず共通です。そしてうっかりしている間に、民衆もその政策に乗せられ、宗教的権威集団も国家の権力構造の手先のように操作されるのです。そのシンボルとして「金冠のキリスト」が出現するのです。

c 歴史の中での変質

キリスト教は歴史の中で、変質していきました。とくに、権力者や支配者がキリスト教の力を利用しようとするときには、大きく変質しました。近世には、植民地支配をはじめ、あらゆる分野でその悪徳をほしのままにしたことも歴史の事実です。この変質に対する自己批判と自己変革への情熱と具体的たたかいを忘れるときキリスト教はキリストの真理から離れ、荆冠を金冠に変えたように、民衆の苦悩の救いよりも、民衆に更に深刻な苦悩と搾取と抑圧を与える道具になってしまふのです。その過ちに目覚め、反省と悔い改めにもとづく自己変革が今日のキリスト教の課題であることに気付く必要があります。

四 キリスト教と部落差別（私の体験から）

a 一九七五年五月一五日

私にとって、一九七五年五月一五日という日は、忘れることのできない日となりました。当時、私は日本キリスト教団の副議長をしておりましたが、東京の教団会議室で、部落解放同盟の方々とこの会合が持たれたのです。会合の主旨は、日本キリスト教団関係の文書をはじめ、教会その他で、おびただしい部落差別の事実が発見されたことによる事実確認のためでありました。提示されたリストの中には、故賀川豊彦の名著と言われてきた「貧民心理の研究」の中の部落差別をはじめ、教団内の指導的立場にある人々の差別文書、牧師の部落差別発言等々がぎっしりと詰まっていました。

これに対して教団は、心ある人々の警告にもかかわらず、無視や無関心を決め込み放置してきたことになんの反省もしないという体質を指摘されました。何の弁解もできない教団の現実でありました。

その確認から、教団として今後どのような取り組みをしていくのか。それは教団の自主性に任せられましたので、その事実から出発した取り組みが大きな課題として残されました。それは、主体を賭けた部落差別問題との取り組みの出発の日となりました。

b 自己変革への旅立ち

私は、教団の組織をあげて、自己反省と悔い改めにもとづくキリスト教徒、キリスト教団としての取り組みの出発にあたって「荊冠のキリスト」に深く連れもどされました。「金冠のキリスト」を仰ぎながら、この世の権力に癒着したままの自己自身の姿に気付かされたのです。人間の尊厳を口に語り、愛を説きながら、現実の部落差別の問題に無関心を装いながら生きている自己自身の姿もはつきり見えてきたのです。

それは、ひとりのキリスト者の自己変革への旅立ちとすることができません。そして教団の心ある人々と共に、自己反省とキリスト信仰の良心にもとづく部落差別問題との取り組み具体化が始まりました。

一九七五年七月一五日に教団組織の中に特別委員会が設置されることが可決され、八月一日にはその委員会活動が開始されました。そして今日まで満一八年二ヶ月の歳月が流れました。この間に、日本キリスト教団部落解放センターが設立され、一六教区中の一四教区に部落差別問題特設委員会が生まれました。京都教区には部落解放センターが設立されました。また、同問題に取り組む宗教教団連帯会議（同宗連）も設立され現在六七教団三連合体がこれに加盟して、それぞれの立場から連帯し

での取り組みが続けられています。それは一八年前には想像もできなかったことであります。しかし、活動の組織が作られたことが直ちに宗教者、宗教教団の真実の取り組みができていくことにはなりません。

いわゆる「ハード面」はできて、問題は「ソフト面」にあります。キリスト教、キリスト教団が真実に部落差別問題に取り組み、一日も早く部落差別を追放し根絶する日を迎えることができるためには、これからこそ正念場のたたかひが必要なのであります。

c キリストとの出会い

一九七五年五月一五日に日本キリスト教団会議室で部落解放同盟代表のN氏は会合の締めくくりの言葉として次のように語られました。

「私はあなたの方のようにキリスト信者ではありません。聖書もあまり読んだことがありません。しかし、キリスト教にまつた多くの素人である私が考えても、あなた方の信じているキリストさんがここに來られて、「おまえさんたちはこれでいいのだ」とは決して言われなれないと思います。どうかあなたがたの性根を入れ替えて、部落差別を根絶するために真剣にやっつてほしいと思います。」

この言葉は、どんな神学の言葉よりも私の胸に深く突

きささりました。それは「あなたは、キリストに出会っているのか」という厳しい問いであったからです。

キリストを信じていると言いがら、キリストに出会っていないという悲劇、キリストを語りながら、キリストに出会っていないという悲劇、これが私の反省の根源にあることなのです。

私にとって部落差別を始めとするいろいろな差別問題との取り組みは、単なる運動ではありません。それは、この取り組みを通して、真実のキリストとの出会いを経験することにほかなりません。「金冠のキリスト」との出会いではなく、「荊冠のキリスト」との出会いであり、その出会いによる自己自身の変革であります。そのことが一八年間の根源的エネルギーでもありました。そして、このことは完全解放の日まで変わることはないと信じています。

d 解放運動に学びつつ

部落解放運動は具体的な課題の中で、私に真実のキリストとの出会いを新しく実現してくれました。観念的には分かっている、人間は現実の具体的課題に直面しなければ本当のことが分からなくなるものです。差別の現実に取り組み、そこから人間の尊厳と人権の確保に心血

を注いでたたかう時、私には、キリストの十字架と復活と教会の誕生の時に起こった奇蹟的出来事が非常に力強い現実性をもって迫ってきます。

これは、宗教者が解放運動に学びつつ、自己自身の究極的な生命の尊厳に目覚まされ同時に他者の生命の尊厳に目覚まされる体験であります。

「同和問題との取り組みなくしては、もはや今日の宗教者たり得ない」との自覚によって「同宗連」は発足しました。この言葉はキリスト教にも、仏教にも、神道にも、新宗教にも共通にあてはまるものです。そこに、現代日本の宗教界の新しい自覚と勇気の根源があると思います。

五 宗教と部落解放

a 差別の現実から

観念からではなく、差別の現実に触れ、そこから解放の情熱を与えられることに、宗教の現代的意義があります。現実を目をつぶる時、人間の尊厳に対する感覚も、差別に対する怒りも、解放の喜びも消え失せ、誘惑に晒されながら消えて行く宗教の姿があります。

事実の凝視から、人間の中に生き続ける不当な差別の姿を見出し、神の正義とは何かに鋭い感覚を持ち続ける

宗教者、宗教教団の存在が可能になります。

b 新しい宗教改革

宗教改革という言葉は世界史の上では一五一七年（永世一四年、日本では武田信虎の活躍した時代）一〇月三一日にカトリック教会の一修道士マルチン・ルッテルが当時の墮落したローマ・カトリック教会の政策に対して、九五ヶ条の抗議文をウィッテンブルクのシュロス・キルヘ（城教会）の扉に張り出したことに端を発して広がったキリスト教会の改革運動を指しています。このルッテルの信仰の良心による勇氣ある行動はプロテスタント（抗議する者という意味）教会の出現となり、今日では世界に約四億人以上の信徒が存在しています。一人の信仰と勇氣と行動によって始められたものが、四七六年後には四億人となるという驚くべき歴史の事実であります。しかし、今日の時点からこの宗教改革の問題を点検いたしますと、そこには尚決定的な問題が残されていることがわかります。それは人権の問題であります。教会の改革はなされました。その宗教改革は観念的には人間の尊重、人権の確保、愛し合う生活、等々についての論理を完結させています。けれども、宗教改革者たちをはじめ、今日までプロテスタント教会の中に現れた差別事象

は際限がないほどあります。さきに申しあげました故賀川豊彦の著書も歴然としたプロテスタント教会から生まれたものであります。日本のプロテスタント教会の中心には「聖者」とまで言われ尊敬された人の著書であります。そして、いまなお賀川豊彦擁護論者が後を断たず、差別はすべての人の「原罪」であるから解放運動などによって無くなるような簡単なものではないと、差別を人間の罪の問題に解消させようとする人々もいます。このような人々は差別の現実には無知であったり、見て見ぬふりをしたり、解放運動を冷やかに論評したりしています。自己自身が差別する側に立っていることに対する自覚も反省もありません。差別の現実から出発することなく、観念の立場からの結論に自己の解決と安心を見出すうとしてゐるのです。

このような改革されたと考えている宗教そのものが、いま改革の対象となつてゐるのであります。その改革は人権という視座からなされようとしてゐます。貧困に喘ぐ者たちの現実の改革は、貧困にさせてゐる者たちの自己変革なしには不可能です。貧困者に問題があるのでなく、富者に問題があるのであります。差別によって苦しめられ、痛め付けられてゐる者の改革は差別してゐる者の自己変革なしには不可能です。被差別者に問題があるので

はなく、差別者にこそ問題があるのであります。

富者がいなくなれば、貧者はいなくなります。差別者がいなくなれば、被差別者はいなくなります。この単純明快な原則にすべての人が気付く、そこに帰り、そこに生命の根源を見出すとき、改革のすべては可能性の希望の光りの中におかれるのです。

新しい宗教改革の原点は差別の現実の直視、差別を造り出す者としての自己の現実の直視と自己反省（宗教的には悔い改め）、完全な解放をめざしての具体的たたかひの継続、そして、共に生き抜くことを通しての人間の喜びの確保、これらの希望に貫かれた自己変革、にあるのです。このようなことは、いま世界に起こつてゐる「解放の神学」、「民衆の神学」、「荊冠の神学」等の論理と実践の中にその萌芽を見ることができます。

新しい宗教改革はひとりキリスト教界の問題ではなく、全宗教界にそれぞれの立場から起こつてゐます。それは二一世紀に向かつての希望と言わなければなりません。

c 共に生きる日々をたたかひとる

改革とか自己変革とかいっても、そこには幾多の難関があります。その難関の多くは個人的なことよりもこの社会構造そのものからくる問題が多いのです。構造の变

革は個人的な決意とともに、連帯による変革のたたかいがなければ不可能です。

「それでは世間が許さない」とか「世間体が悪い」とか、言いながら私達の生活は流れています。しかし、その「世間」と言われるものの正体はいったい何でしょう。この日本の社会では明らかに「天皇制」を中心にした社会構造が生きています。「万世一系にして犯すべからざる天皇」という明治憲法のもとにおける教育とその構造は根強く私達の社会を包んでいます。世間と言う場合、その構造によって生まれた上下関係と社会意識が支配的になり、そのため人権抑圧や差別の強化の政策が行われても、それに対する不当性に対する自己主張や糾弾の力は非常に鈍くなっております。いわゆる「長いものには巻かれる」という考えが一番安全な道であるという感覚が支配的です。この構造の中で、この構造に批判的に係わることは危険でもあるという無意識の感覚が滲み渡っているとも言えましょう。そのために、差別は構造的に温存され助長もされています。そこに自己変革の壁が立ちほだかるのです。

しかし、そのために差別の中に放置され、差別の中で苦悩し、差別のために生命まで落とすという現実が残されていることを知るとき、そこから生まれる人間の生き

方は、生涯をかけてこの矛盾と不条理を変革してゆく情熱と勇気に変えられないではおりません。それが真実の人間の生き方であるからです。その生き方に目覚めないうち人間は人間としての本質から逸脱させられた状態にあるといえましょう。

共に生きるということは、この人間の本質の目覚めを共に分かち合い、共有し、共に人間としての喜びを持続させることであります。このためのたたかいはしていくことが現代社会の中ではまだ必要なのです。たたかいていうのは敵を倒すことではありません。敵を無くすために、敵と共に生きることです。それをキリストは「互いに愛し合いなさい」と言う言葉で教えられました。それが十字架であり、復活であり、聖なる霊の付与でもあります。

d 限りなく愛に収斂(しゅうれん)される希望

人間の未来はどうなるのでしょうか。始めのあるものには終わりがありません。人間も無限ではありません。やがて人類にも終末の日がやって来ます。それはひとりの人間が生まれて、育ち、生き、そして死を迎えることと同じです。しかし、死はおわりではありません。死から新しい生命が生まれます。その生命の形態について人間

はなにも知ることはできません。ただ一つこの人間生活の中の経験から知り得ることは、「永遠とはこの時間の延長線上にある無限の時間ということではなく、人間と人間の人格関係のなかでの愛の関係である」ということです。

人権の尊重は人間同志の尊敬と愛の関係なしには不可能です。時間に縛られず時間を忘れるほどの喜びも愛し合う関係から生まれます。共にこの時間の中に生きる者の平和と生き甲斐も互いの愛の関係の中から確実なものとなります。これらの経験は人間の未来を表わす一つの象徴であると思います。それは人間の行き着く本当の世界であり、また現実の本当の世界でもあります。

このように考えて、またこのことを生活の原点において生きる時、人間の未来はすべて「愛に収斂されていく」という言葉の真実性が身に滲みてきます。

わたしたちの解放運動も、それは愛に収斂していく人間のこの時間でのたたかいであり、使命でもあります。また永遠の希望に向かう充実の刻々でもあります。

愛に収斂されていく希望、それゆえにこそ、生命を賭けたたたかいも可能になるのであります。このように部落解放運動は優れて宗教的たたかいであると私は信じております。それゆえに生涯を賭けることもできるのであ

ります。

(おわり)